

君が愛しいから

Contents

君が愛しいから	5
番外編 1	129
番外編 2	185
誘惑のキスをした	211

君が愛しいから

三ヶ嶋美佳はその夜、自宅の仕事部屋でパソコンと向き合っていた。

美佳の職業は小説家兼翻訳家。そのため、一日の大半をパソコンの前で過ごすことが多い。机の上の時計を見て、そろそろだな、と思いながら美佳は笑みを浮かべる。

もうすぐ夫が帰ってくる。

出がけに「今日は遅くなるから、先に寝てて」と言っていたけれど、美佳は仕事をしながら待っていたのだ。ただ「お帰りなさい」と言いたくて。

夫の名前は三ヶ嶋紫峰しほという。彼と結婚したことによって美佳は、「三ヶ嶋美佳」という語呂のいい名前になった。最初は少し抵抗があっただけれど、今は自分の名前を気に入っている。

美佳が結婚したのは、二十九歳で、周りの友人達よりも少し遅かった。職業柄、外出する機会が少なく出会いがなかったのも一因だが、それよりも生来の、のんびりした性格のせいだろう。

しかし、三十を目前に焦あせった。けれど、何をどうすればいいのかわからなくて悩んでいたところ、母からお見合いをすすめられたのだ。

紫峰とは、そのお見合いで出会った。背が高く、顔立ちも整っている彼を見た時、美佳はすぐくときめいたのを、今でもよく覚えている。今までの人生で、紫峰のようなカッコイイ人に出会ったことがなかった。

けれど、紫峰には当時、恋人がいた。あろうことかお見合いのその日、美佳は彼の首筋にキスマークを見つけてしまったのだ。

見たと同時に美佳は「そうよね」と思った。こんな素敵な人にお相手がいらないわけがない。いい男を間近で見られただけでもラッキーだと思い、怒りは湧かなかった。

美佳は、その場で縁談を断った。それで話は終わるものだと考えていたけれど、紫峰はなぜか引かなかった。半ば強引に次のデートの約束を取り付け、その後も熱心に美佳を誘ってきた。そうして何度目かのデートをした時、彼は恋人との関係を清算したと、きっぱり宣言したのだ。

美佳は紫峰とデートを重ねるうちに、彼のまっすぐな想いに惹かれていった。

プロポーズの時、「どうして私と結婚したいの？」と問う美佳に、紫峰は「君が好きだからに決まっているでしょう」と答えた。その言葉は美佳の胸に響き、この人に一生ついていこうと決めたのだ。今の幸せがあるのは、あの時お見合いをしたから。

美佳が物思いに耽ふっていると、玄関が開く音がした。

美佳は立ち上がり、帰ってきた彼を玄関まで出迎えに行く。

「お帰りなさい、紫峰さん」

午前二時。紫峰はここ一カ月ほど、いつも帰宅が遅い。電車で帰ることができない時間なので、最近はずで出勤していた。紫峰の仕事は、要人警護、いわゆるSPと呼ばれる特殊なもので、不規則な勤務形態だ。

「ただいま。美佳は仕事で中だった？」

そう言いながら玄関で靴を脱ぐ紫峰の顔には、疲労が滲にじんでいる。ネクタイが緩ゆるんでいるのは、帰りの車の中でそうしたからだろう。

「そう、仕事で。ご飯、食べます？」

美佳は言いながらキッチンへと歩き出す。けれど、残念なことに返ってきたのは「いらぬ」という返事だった。

「とにかく寝たい。ごめん、美佳」

寝室へ直行する紫峰を、美佳は見つめる。

結婚して一年以上。紫峰はいつも、忙しそうだ。結婚記念日も一緒に過ごせなかったし、新婚旅行だって、流れに流れて行けていない。仕事柄、昼も夜もなく、休みも不規則だからしょうがないのだ。美佳はがっかりしながらも、仕事を再開しようとする自室に向かう。

そしてパソコンに映し出されたアルファベットを眺めてため息をつく。今やっているのは翻訳の仕事だ。最近では小説に専念するために、翻訳の仕事はほとんど断っているのだが、今回はどうしても、と言われて引き受けた。明後日までには仕上げなければならない。これが終わったら、次は雑

誌のコラムを書いて、それから新作の小説の打ち合わせも控えている。

「紫峰さんだけじゃなく、私も意外と暇がないのね」

カレンダーを見つめていると、ドアをノックする音が聞こえた。振り向くと、ドアが開き、紫峰が姿を現した。

「美佳は寝ないの？」

「……あ、ごめんなさい。急ぎの仕事なの。もう少ししたら寝るから、紫峰さんは先に寝てて」

美佳が笑みを浮かべて言うと、紫峰は頷うなずいて、ため息をついた。それから美佳の傍にやってきて彼女が座っている椅子を回転させる。そうして自分の方へ身体を向けさせると、美佳の頬と二の腕を撫でた。

紫峰はじつと美佳を見つめたまま、微かすかに笑う。

「仕事なら邪魔できない」

そう言って、美佳の前に腰をおろし、膝に頭をのせてきた。

先ほどまで腕を触っていた紫峰の右手は、美佳の指の間に差し込まれている。右手は手を繋いだまま、左手は美佳の腰のラインをなぞり、太ももを撫でる。その仕草がセクシーで、美佳は動けなかった。「疲れた」

呟く声には艶があつて、ドキッとす。紫峰の触れ方や、膝に頭を預ける様子を見て、もしかしてそういうことをしたいのかも、と考えた。

けれど今の美佳には、片付けなければならぬ仕事がある。応えたい気持ちはあるけれど、今はちよつとできない。でも疲れて帰ってきた紫峰がこうして甘えてきているのだ、彼の気持ちに添いたいと思ひ、微笑んだ。

「お疲れさま、紫峰さん」

美佳は繋いだ手に少し力を込めて握り返した。親指で紫峰の手の甲を撫で、それからもう片方の手で紫峰の頭を撫でる。すると彼が身を起こし、美佳の首に腕を回してきた。美佳の首筋を撫でる仕草は、明らかに誘っている。そのまま身体を引き寄せられた美佳は、自分から紫峰に顔を近づけた。キスをするのも久しぶりだ。

短いキスをする。それで満足したのか、紫峰は微笑んで立ち上がってしまった。もう少し深くキスをしてほしい、という思いが美佳の中に湧き上がるが、紫峰は頭を切り替えたようで、すつと離れて言った。

「仕事の邪魔をして悪かった。また明日」

「……はい、また明日」

ドアが小さく音を立てて閉まる。その音が耳に残って、美佳はしばらく仕事に手がつかなかった。早く仕上げなければ、紫峰との時間だって取れないのに。

時刻は午前二時半。ため息ばかりが零れる。こんなことでは仕事が進まない。

気を取り直して何とか区切りのいいところまで進め、それからシャワーを浴びた。髪の毛を乾か

しながら時計を見ると、午前三時を過ぎている。

「……紫峰さん……きつと明日も早い。七時に起きて、八時には家を出るはず」

今、美佳が寝室に行ったら、紫峰を起こしてしまうかもしれない。

そう思うと、寝室に入るのは躊躇ためらわれた。そこで、ひと息ついて気合いを入れ直す。

「やっぱり、仕事しよ」

美佳は自分の部屋に戻った。

紫峰がぐっすり寝入っているだろう明け方まで仕事して、それから少しだけ寝て、紫峰のために朝食を作る。そう思うと少しやる気が出てきて、今度は仕事がかどった。この仕事が終われば、紫峰との時間が作れる。

美佳はそう思つて頑張った。

* * *

「もう少し仕事をする」と言った美佳を残し、紫峰は先にベッドに入った。

疲れていたが、明け方、なぜか目覚めてしまった。仕方なくヘッドボードの時計を見る。

「まだ五時……」

もう一度寝ようと思つたが、ふと思ひ立ってベッドを出た。

美佳の自室の前まで行くと、中から光が漏れている。「まさかこんな時間まで仕事を？」と思いつながら扉をそっと開けると、美佳はパソコンに突っ伏して寝ていた。首を痛めそうな体勢だったので、紫峰は心配になった。まだ夜は冷える季節だというのに、上着も着ていない。

「美佳」

身体を揺らすのが、起きる気配はなかった。紫峰は仕方なく、美佳を抱え上げる。

それでも起きる様子はない。

「こんなところで寝るなんて。身体を痛めるぞ」

寝室へ運び、美佳をそっとベッドにのせて布団をかける。その横に紫峰も寝転んで、柔らかい彼女の身体を抱き寄せる。

紫峰は安心してふたたび目を閉じた。

* * *

「あれ？ あ、え？」

起き上がると身体が軋んだ。肩と腕が、とにかく痛い。

「いった……」

美佳は顔をしかめた。どうにか起き上がって腕を上げると、やっぱり痛かった。

昨晚、机に突っ伏して寝てしまったようだ。でも、今美佳がいるのはベッドの上。誰がここまで連れて来てくれたのかは、明らかだ。

「痛い」

「そりゃ痛いよ、美佳。パソコンの上で眠ってた」

痛みを耐えながら背中を丸めていると、呆れたような声が届いた。見ると、寝室のドアに身体を預けるようにして紫峰が立っている。ジャケットは着ていないが、きつちりとしたスーツ姿。その立ち姿から、疲れは感じられなかった。

今日もカッコイイ、と思いつながら、美佳は紫峰に聞いた。

「紫峰さん、ここまで運んでくれたんですね？」

「何でか五時ごろ目が覚めてね。部屋をのぞいたら、君がパソコンに突っ伏して寝てた。あんなに身体を丸めて寝ていたら、肩や首を痛めて当たり前だよ」

美佳がふと時計を見ると、七時五十分を過ぎようとしていた。

「ご飯は？ 食べた？」

「軽く。もう行くよ」

食事を作れなかったことに、がっかりした。疲れている紫峰を癒すために、朝食を作るつもりだったのに。自分が紫峰に世話をかけては、意味がない。

顔を上げると、紫峰が微笑みながら手招きしていた。美佳は首を傾げつつ紫峰の傍に行く。何だろ。

「うしろを向いて」

「うしろ？」

「いいから、うしろ向いて」

美佳は何のことかわからなかったが、言われるままにうしろを向いた。すると紫峰の腕が脇の下あたりに伸びてきて、美佳を羽交い締めにする。

「おとなしくしていて。ちょっと痛いよ」

そう言った直後、紫峰の腕が美佳の肩をうしろに引っ張った。

「いっ！ 痛いっ！ や、ギブ、ギブッ！」

「もう少し」

さらに力を込めて肩を引き上げられて、美佳は痛さのあまり大声で叫ぶ。

「紫峰さんっ！ 放して！ 痛い！」

紫峰は笑うばかりで放してくれない。

「頑張って」

肩がゴキゴキいいような感じだった。さらに、少し力が緩められたと思ったら軽く左右に揺らされて、これも痛かった。ようやく羽交い締めが解け、最後に腕を強く引っ張られた。ゴキリ、と関

節が鳴った気がした。

「痛っ！」

紫峰は、軽く背を撫でてくれた。

「治った？」

美佳はようやく、紫峰に向き直ることができた。彼はニコッと笑って美佳を見ている。

「痛かったです。やる前に言ってほしかった」

「ちよっと痛いって言ったよ？」

確かにそう言ったけれど……

「美佳、肩が凝ってるね。たまには運動しないと。あと、机で寝ないこと」

「ごめんなさい。でも……もうしないとは言い切れない」

美佳の言うことに少し苦笑して、紫峰は横を通り過ぎていく。寝室にあるクローゼットからジャケットを取ると羽織りながら美佳に言った。

「だったら、さっきのやつ、またやるしかないな」

ジャケットのボタンを留めて、それから美佳の髪の毛に触れて、軽く唇を重ねる。

「たまには仕事を休んで、身体も動かして」

肩を軽く叩き、紫峰は玄関へと向かう。

美佳は寝間着姿のまま紫峰を追いかけ、靴を履くその背に言った。

「行ってらっしゃい、紫峰さん。気をつけて」

紫峰は振り返り、美佳の頬を撫でる。

「今日も遅くなるかもしれない。先に寝てて」

紫峰は笑顔を見せて玄関を出る。

「行ってきます」

美佳は手を振って見送った。今日も遅くなる、という言葉にがっかりしながら。

美佳の生活も時間に不規則で、仕事を立て込んでくると、変な時間に寝て、変な時間に起きてしまう。それでも紫峰と生活するようになって、少しは改善されたけれど……

ここ数日のように、お互いの生活リズムが合わず、あまり会話もできないことが続く、ため息が出る。

「たまには二人でゆっくりしたい……なあ」

その願いが叶うかどうかなんて、まったくわからない。紫峰は職業柄、夜中でも何かあれば仕事に行く。それは仕方のないことだ。

あれこれ考えてもどうしようもない。美佳はとにかく自分の仕事を片付けようと決めた。まず目の前の原稿を仕上げなければ、ゆっくりもできないから。

紫峰のおかげで少し軽くなった肩を回しながら、身支度を整えるために美佳は洗面台に向かう。

そして自分の顔を見て、またため息。

「クマができてる。もう若くない証拠？」

美佳は今年で三十歳。もう決して若くない。

もったきちんとした生活ができるよう努力しなければ、と気持ちを新たにした。

愛する夫の前では、いつも綺麗でいたい。

2

「美佳先生、この度はすみませんでした」

美佳の担当編集者である早川光里が、柔らかなウェーブヘアを揺らしながら頭を下げる。

彼女は先ほどようやく終えた翻訳原稿を、美佳の家に取りに来たのだ。

光里は以前は堤先生、と呼んでいたが美佳が結婚したのを機に、美佳先生と呼ぶようになった。

「間に合ってよかった」

美佳が頼まれていたのは、アメリカで有名な恋愛小説の日本語訳。

英語だったので、気負わず引き受けることができた。フランス語の案件だったら、今回の納期ではちょっと引き受けられなかったかもしれない。美佳は英語とフランス語のどちらも扱うが、英語の方が得意なのだ。

そうは言っても、英語だつて駆け出しの頃は随分苦勞した。けれど真面目にコツコツ取り組んできたお陰で、今では信頼してくれる出版社も多い。

「……本当に急なお願いで申し訳ありませんでした」

「気にしないで、光里ちゃん。恋愛小説だつたし、私も楽しみながらできたから。あとは、連載小説の執筆……これはもう少し時間があるのよね？」

美佳より少し年下の光里は、なぜだか顔を曇らせる。

「すみません、連載の方はまだ大丈夫なんです、以前お話しした美佳先生の小説の二時間ドラマ化の件が本決まりとなりまして……あの、連載の方はスケジュールを調整しますので、近々ドラマの打ち合わせに出て頂きたいんです。実は……ドラマの担当は、営業部の戸田さんと、企画部の菅野さんなんです」

そう言つて美佳を見つめる。

光里が美佳の担当になつて四年経つ。二人で力を合わせて仕事をしてきて、今では親友のような関係を築いている。そんな光里が、心配そうに美佳を見るのは、しょうがないこと。

営業部の戸田晴樹。美佳よりも四つ年上の、仕事ができる人。今は、営業部の主任だつただろうか。この戸田という人物は、三年前まで美佳が付き合つていた相手だ。本当に、彼のが好きだつた。けれど戸田は、美佳とは結婚を考えられない、と言つた。

当時はかなりショックを受けて、言われた直後、美佳から別れを切り出した。結婚を考えられな

い相手と思われながら、隣で笑うことなんてできないと思つたから。

自分の容姿が普通で、スタイルもよくないことはわかつていた。かたや戸田は容姿もそれなりにいいし、仕事のできる男だつたから、きつとモテたはずだ。

出合いは、彼が美佳の小説の営業担当になつたことだつた。必ず自分がヒットさせる、と熱心に語つてくれた。何度も打ち合わせを重ね、そして本が世に出て、それを美佳が手にする頃、彼から付き合つてほしいと言われたのだ。

正直、嬉しかった。美佳は戸田の仕事に対する熱心さや、有言実行の男らしさに惹かれていたから、すぐにOKした。

戸田と付き合い出した一年後に、光里は美佳の編集担当になつた。だから、美佳が戸田と付き合い合つていた当時のことを、よく知つているのだ。

二年と少し付き合い合つて、心も身体も戸田のほうへ向いていたあの頃。別れるなんて微塵も考えていなかった。このままこの人と結婚するのだ、と美佳はずつと思つていた。

「大丈夫。戸田さんも私も大人だし、もうお互いに結婚してるんだから」

戸田は美佳と別れた一年後、子供を授かつて結婚したそう。それを聞いた時、美佳は正直落ち込んだ。自分とは考えられないと言つたのに、他の人とはこんなにすぐに決めるのか、と。当時は戸田を許せない気持ちになつた。けれど、そんな美佳のささくれだつた心も、時間が癒してくれた。ちようどその頃、小説でヒット作を出すことができ、少しずつ自分に自信を持てるようになってい

った。

そして一年後、二十九歳の時。結婚という二文字に本気で焦りを感じ始めたその頃、紫峰と出会った。

「何よりも、紫峰さんのほうが素敵でしょ？」

美佳が茶目つぷりに言うと、光里は笑った。

「そうですねー。結婚式で初めてお目にかかった時は、かなり驚きましたよ。しかも、お色直しで、警察官の制服で登場するんですもん。SPって聞いてびっくりしましたけど、カッコイイって思いました」

美佳の父が警察官だった縁で、紫峰とは出会った。

「で、ドラマ化の打ち合わせは、いつなの？」

美佳が聞くと、光里はバッグからスケジュール帳を取り出して確認を始めた。

光里がそうしている間、美佳はふと窓の外を見て、紫峰のことを考える。

昨日も一昨日も帰りが遅かった。今日も遅くなるかもって言っていたな。

最近、一緒に食事をしていない。紫峰は外食が続いている。疲れている紫峰にバランスのとれた食事を、と思うのだが、美佳も忙しくてここしばらく準備できていない。

強い風が吹き、窓ガラスを揺らす。まだしばらく寒い日が続きそうだから、今度二人で食事をする時は、鍋にしよう……と思った。

3

光里と自宅で打ち合わせをした翌週、美佳はドラマの打ち合わせのために出版社に向いた。

美佳の小説がドラマ化されるのは、これで二度目。美佳の作品は恋愛小説が多いが、今回の題材はヒューマンドラマだった。

キャストは今話題の役者揃いで、制作者も気合いが入っている。

打ち合わせは約三時間ほどかかったが、何とか滞りなく終えることができた。

「いいドラマにしましょうね」

帰り際、監督にそう言われて、美佳は笑顔で「そうですね」と答えた。

帰ろうとエントランスに向かう途中、戸田の存在に気付いた。彼もこちらをチラリと見ると、他の社員との話を切り上げ、やって来る。

「久しぶりだ、美佳」

「戸田さんも元気そうですね」

美佳がそう言うと、彼は苦笑して頭をかいた。

「結婚したんだっけ？」

美佳が頷くと、戸田は笑みを向ける。

「三ヶ嶋美佳、になりました」

「なんか舌を噛みそうだな。ところで三ヶ嶋さん、これから時間ありますか？ もう少し打ち合わせしたいことがあるんですが」

「はい、どこでしますか？」

指定された喫茶店は、以前よく美佳と戸田が行った店だった。出版社から歩いて五分行の場所にあるその店は、お洒落で紅茶が美味しい。

二人で喫茶店まで歩く。店に着いて案内された席に座ると、さっそく戸田はウェイトレスを呼んだ。コーヒーと一緒に美佳の好きなミルクティーも注文して、こちらに笑顔を向ける。

「紅茶でよかったよね、美佳」

彼が美佳のことを名前で呼ぶのは、しょうがないことなのだろうか。あえて訂正するのも、逆に意識していると思われそうで躊躇われた。

美佳が運ばれてきた紅茶に口をつけようとした時、近くで選挙演説が始まったようだった。

「ああ、そういう日は、元総理大臣推薦の候補者の演説があるって言ってたな」

「そうなんです」

「物々しい雰囲気、護衛みたいな男たちもいたぞ」

護衛と聞いて、美佳は思わず反応してしまった。もしかしたら紫峰だったりして。いや、そんな

偶然はないか。

「ああいう護衛の人たちって、SPって言うんだろ？ この間も見ただけど、顔で選んでるのかってくらい、イイ男ばかりだったな。美人な女性SPもいた」

紫峰も端正な顔立ちで、背が高く、スタイルもいい。細身だけれど日頃から身体を鍛えているだけあって、腹筋も腕の筋肉も相当なものだ。そういえば紫峰の部下も皆、美形揃いだ。顔で選ばれたと言われても頷ける。そんなことを考えていたら、美佳は何だか可笑しくなった。

「どうしたんだ？ 急に笑いだして」

無意識のうちに笑みを浮かべていたのだろう、戸田に指摘されて、美佳は我に返る。

「何でもないです」

「そう？」と言うと、戸田は気にした様子もなくコーヒーを飲んだ。ひと口飲んで顔をしかめて、砂糖を追加する。昔から甘党の戸田は、コーヒーに砂糖を二つも入れていた。

「美佳は、幸せ？」

言われて、美佳は顔を上げた。戸田はにこりと笑って、こちらを見ている。

「幸せです。どうして？」

「俺はたまに早まったな、って思う時があるからさ」

美佳とは結婚できないと言った戸田。その一年後に他の女性と結婚したくせに、何を言っているのか。

「奥さんのこと、好きじゃないの？」

「それなりに好きだよ。でも今は子供の母親って感じだな。俺の奥さんって感じは、あまりしない」
それなりに、という言葉に美佳は違和感を感じた。けれど、その心に引っかかったものが何なのかはわからない。

「美佳はこんな俺に対して、何とも思わない？」

質問の意味がわからず、美佳は首を傾げながら問い返した。

「何ともって？」

「……俺はあの時、美佳との結婚は考えられないと言ったけど、まったく考えていないわけじゃなかった。別れ話になった日、本当は『あと一年待ってほしい』って言うつもりだったんだ。でも、美佳にもう別れる、つてきっぱりした態度を取られてかっとなって。勢いで別れてしまった」

そう言っつて美佳を見る戸田の目は、昔と同じだった。

確かに、当時は何も思わなかったわけじゃない。でも、こうして自分も別の人と結婚しているのだから、今さら何も思うことはない。時間は美佳を大人にしたのだ。

「あの時は、仕事とかでも採め事が起きたりして、いっぱいいっぱい……」

戸田の話聞きながら、美佳は自分の左手の薬指に触れる。

仕事で採めること、それは誰だつてある。時にはプライベートに影響を及ぼすこともあるだろう。紫峰の仕事は危険を伴うし、神経が擦り減るだろうに、紫峰はあまり、愚痴を言わない。

『帰つてきて、美佳の手料理を食べると落ち着く。いつもありがとう』
紫峰はいつも、そう言っつて微笑むだけだ。だから美佳は料理を頑張る。お風呂を沸かしたり、できる限りのことを整える。

「美佳はよく俺の愚痴を聞いてくれたよな。聞き上手で、俺はそこが好きだった」

付き合つていた頃も戸田は、そんなことを何度も言つていた。美佳自身が好きだとは、あまり言われた記憶がない。それでも美佳は、話を黙つて聞く自分が好きというなら、それでも構わないと思つていた。

「奥さんはそうじゃないの？」

「今は子供で手一杯つて感じ。そんな状態だから、相談もできない」

「でも言つてみないとわからない。夫婦なんだから、話し合えばいい」

美佳が言つと、戸田はため息をついた。

「美佳は今の旦那に不満はないのか？ あるだろう、少しくらい」

不機嫌そうに窓の外を眺めながら戸田は言う。

「最近帰りが遅いから、早く帰つてきてほしいくらい、ですな」

ウソだろ、と戸田が呆れたように笑う。

「ウチの奥さんはもつと、いろんなこと俺に言うけどな。片付けしろとか、仕事のカバンをリビングに置いたままにするな、とか。掃除を手伝つてほしいとかさ」

「言わなくてもしてくれるんです。私のほうが大雑把おおざっぱなくらい」

こと整理整頓に関しては、美佳より紫峰のほうが几帳面しつこめんなのだ。

美佳がリビングに置きっぱなしにしていた書類なども、気付くと紫峰がファイルに詰めて、美佳の机の上に置いてくれていたりする。

「今の人に、出会えてよかったです。戸田さんも、きっと今の人がベストだと思います。私とは結婚できない、って言ったけど、今の人とはしているから」

「子供ができたからさ」

「それでも結婚しないって人はいます。でも、戸田さんはそうしなかった。奥さんのことが、それだけ好きで特別だったんですよ」

美佳の言うことに、戸田は笑った。

「大人だよな、君は昔から。それに、痩せて綺麗になった。それって旦那のせい？」

「たぶんそうです。本当に素敵な人で、私にとつてかけがえのない人」

「本当にしつかりしてるよな。元彼がこうして甘えても、優しく受け流して、おまけに旦那とのノロケ話までするなんて」

戸田が苦笑して美佳を見る。そして「打ち合わせは終了」と言って店を出ることになった。

美佳もそれに頷うなずいて席を立つ。

会計を済ませて店を出ると、演説の声は一層大きく聞こえてきた。

「……選挙が終わるまでの辛抱だな」

駅へと向かう大通りで、演説は行われていた。

「あ、俺がさっき言った美人。今日もいる」

選挙カーの下には数人のスーツ姿の男たち。その中に一人、きつちりとパンツスーツを着た女性が確かにいる。

その女性は、紫峰の部下の坂野さかのだった。辺りを見回すと、他にも美佳の知っている顔があった。ということは、ここに紫峰もいるのだろうか。

「あ、やっぱりいた」

美佳が呟くと、戸田は美佳を見る。

「知ってる人がいたのか？」

美佳は頷いてあの人、と紫峰を指さす。

「ふうん、イイ男だな」

「私の旦那様なんです」

「……は？ マジで!？」

美佳が頷くと、戸田は「えー！」と驚きの声を上げながら、マジマジと見つめてくる。

仕事中の紫峰を見るのは初めてで、嬉しかった。機密事項の多い仕事だから、こんな機会は滅多にない。

「警察官なのか……？ 驚いたな」

「そう、警察官なんです」

「気付かないなあ、こっちに」

「遠いし、無理だと思えますよ」

美佳が答えると、戸田はしばらく紫峰を眺めてから言う。

「マジでイイ男だな。本当に旦那？」

「……私が平凡な顔をしているからって、失礼ですよ」

美佳がムツとすると、戸田は「悪かった」とすぐに謝ってきた。

カッコよくて素敵な紫峰。

今日は早く帰って来るだろうか。

「俺はそろそろ会社に戻らなきゃならないけど、美佳はもう少しここにいるか？」

戸田から言われて頷いて、その場で彼とは別れた。

戸田と久しぶりに話したら、もっと動揺してしまうのではないかと思っていた。けれど、何ともなかった。

「なるべく、早く帰ってきてね、紫峰さん」

聞こえるわけではないが、口に出してみる。

それから美佳はしばらくの間、仕事をする紫峰の姿を遠くから見つめていた。

* * *

仕事が一段落した美佳は買い物へ行き、食事を作って紫峰を待つつもりだった。けれど今日もやはり、紫峰の帰りは遅い。先に休むことにした美佳は、その時、眠っていた。

「ん……？」

背中や鎖骨、胸のあたりに温かい感触があり、美佳は目を覚ます。

「目が覚めた？」

美佳の身体に触れる、紫峰の手。紫峰以外に、こんな風に美佳に触れる人はいない。

紫峰は寝ぼけ眼の美佳の胸を揉み上げ、頂点を時々摘んで感触を楽しんでいる。

「紫峰、さん……っ」

優しく胸を揺らす彼の手に、思わず吐息が零れる。紫峰は美佳をうしろから抱き締め、首筋を辿って肩甲骨にも優しくキスをする。

美佳は思わず、小さく声を漏らした。すると、美佳を抱き締める紫峰の手に情熱がこもり、先ほどよりも強く胸を刺激される。

美佳は身体が疼き出し、たまらず背を丸めてしまっていた。

「身体を縮めないで、美佳」

耳元でそう言われて、美佳は紫峰の大きな手に自らの手を重ねる。

「待って……あ」

けれど紫峰はそんな言葉など聞いてくれず、抱き締め直されて、美佳は眉を寄せた。久しぶりの感覚に、身体が翻弄ほんろうされる。美佳の全身に快感が広がっていく。

大腿を撫でていた紫峰の手が、美佳の身体の内側へと伸び、下着にかかる。しとやかに閉じていた美佳の足の合間に滑り込んできた紫峰の指が、美佳のそこを撫でた。

美佳の潤いでスムーズに指が動くのが恥ずかしい。

次の瞬間、指の一本が美佳の中に沈んでいく。その指は、美佳の敏感な部分を押すように出入りした。

「……っや」

横抱きにされたまま、美佳の中に入った指を緩慢かんまんとに動かされる。あまりに強い快感から逃れたくても、紫峰がしつかりと美佳の腰を押さえているので叶わない。

さらに指を一本増やされ、美佳の我慢は限界だった。何とか紫峰の手に触れて、必死の抵抗として軽く爪を立てるけれど、指の動きを止めてはもらえない。

「し、ほ……っさ……っあ」

こんな緩慢な快感は、かえってきつい。美佳の息が、次第に上がっていく。濡れた音を立てて中をかき回されながら、胸を揉み上げられると特に堪たらなかつた。

「美佳、おとなしくして」

美佳の耳に唇を寄せた紫峰がささやく。

しかし美佳の口は自然と開いてしまい、声が漏れる。息苦しささえ感じる。

美佳にこんな思いをさせるのは、ただ一人。紫峰だけだ。

「寝込みを襲うなんて酷い」と文句を言っただけの気持ちはあつたが、美佳の身体は紫峰の与える刺激に素直に応えてしまう。

美佳は、自分の臀部でんぶに硬いモノが当たっているのに気が付いた。

紫峰自身はすでにしつかりと反応しきっていて、美佳の中へ入りたがっている。

美佳もすでに紫峰を受け入れる準備ができていた。美佳は手を伸ばして、それを撫でた。するとそれはさらに反応し、スウェットの上からでもわかるくらい、あからさまに主張する。

「……っ」

紫峰が短く、耳元でささやく。美佳はその声に酔いしれ、すぐに返事ができなかつた。すると紫峰は、焦じれるように問いかけてくる。

「返事して、美佳」

美佳、と呼ぶ声も官能に満ちている。

「したい、美佳」

そんな風に言われると、心臓が破裂してしまいそう、と思いつつ大きく熱い息を吐いた。

「……きて、紫峰さん」

喉がカラカラで上手く声が出ない。消え入るような小さな声しか出なかったが、なんとか紫峰に届いたようだった。

紫峰は腰をさらに引き寄せ、美佳の足の間に足を割り込ます。

少し足を開かされた状態で、紫峰の硬いモノが美佳の隙間を探った。何度か隙間を行き来した後、美佳の潤んだ内部に紫峰自身がゆっくりと押し入る。

途端、自然と美佳の口から声が出た。

先ほどまでそこに入れられていた、指とは比べものにならない質量の大きさに、思わず息が詰まる。

「も……っや、紫峰さ……っ」

紫峰はたまにこうやって、美佳をゆっくりと抱く。そうされると美佳は焦れ^じたくて、もどかしくて、つい「早く」と言ってしまうようになる。

美佳はそんな緩やかな快感に、拳を握って耐えるだけ。

今日はどうしろから抱かれているのでできないが、いつものように紫峰が美佳の上^{うへ}にいたら、彼を強く抱き締めていただろう。

「あ……っん」

やわやわと美佳の胸を揺らす手も、時々足の間に感じる愛撫の手も、もどかしくて仕方ない。

紫峰は何度かゆっくりと横抱きのまま腰を打ち付けたあと、背中にキスをして美佳の身体^{からだ}を俯せ

にする。紫峰は美佳に覆いかぶさり、さらに身体を揺する。

「美佳……っ」

堪らないような声が耳に届いて、紫峰も感じているのがわかる。

こうして紫峰に抱かれるのは久しぶりだ。切羽詰まったように美佳を呼ぶ声を聞くと胸にくるものがあり、美佳の身体はさらに疼^{うず}き出した。

紫峰の動きが少しずつ速くなる。ベッドの軋^{こも}む音が部屋中に響く。よすぎて、苦しい。

「ん……っん、んう」

美佳の腰を持ち上げて、紫峰はさらに腰を強く打ちつける。

美佳はもう昇りつめてしまいそうだった。

シーツを掴む手に力がこもる。

そんな美佳の仕草に気付いた紫峰が、美佳の手に自分の手を重ねてきた。手を繋がれ、美佳はますますこの快感から逃れる術^{すべ}を失った。

そのまま腰を強く押し付けられた次の瞬間、美佳と紫峰は同時に達したようだ。紫峰は美佳の中に留まったまま動きを止め、重ねた手を強く握った。

紫峰の忙しない呼吸を耳元に聞きながら、美佳は放心状態になっていた。しばらくすると紫峰が体勢を変え、美佳の内から出ていった。

美佳を仰^{あおむ}向けに寝かせ、ふたたび覆いかぶさるように抱き締める。美佳は紫峰の重みを感じ、満

ち足りた気持ちが胸を占める。

それから紫峰はなぜかもう一度美佳の身体を横向きにし、背中に唇を這わせてきた。唇と舌で下から上へとなぞり、ある一点に達すると少し痛みを感じるくらいに吸う。

「美佳……？」

紫峰が美佳の名を呼んだので、美佳は身体を回転させて満足した笑みを向けた。

「すごい汗。疲れた？」

「……疲れました」

「体勢がきつかったかな」

「そうですね」と言おうかと思っただが、紫峰が優しく頬や頭を撫で、キスをしてくれたので言うのはやめた。紫峰はいつも、行為のあと優しい。愛情を感じさせる触れ方で、もう一度抱かれないと思ってしまう。

美佳はまだ少し息が上がっているが、紫峰はすでに呼吸が整っていて、体力の差を改めて感じる。もう回復したと言わんばかりの様子でスウェットを直す紫峰を眺めながら、美佳は言った。

「……寝込みを襲うなんて」

美佳が抗議すると、紫峰は笑って美佳の頭を撫でた。そして身体を引き寄せて、少し強く抱き締める。

「だって美佳、二週間ぶりくらいだよ？ それに二度も我慢できない」

一度目はいつだったのだろう。しばらく考えていた美佳は、紫峰が遅く帰ってきた日、少し甘えるような素振りで美佳の仕事部屋へやって来たのを思い出す。あの日はパソコンに突っ伏して寝ていた美佳を、寝室まで運んでくれた。

「我慢していたの？」

「したよ。君をベッドまで運んで、でも起こさずに抱き締めるだけにした」

紫峰がそんなことを言うなんて何だか信じられなくて、美佳が内心驚いていると、唇を寄せられた。最初は軽く啄ばむようなキス。次第に深いキスに変わる。

それから紫峰は美佳の首筋に顔を埋めて、大きく息を吐いた。

こんな風に紫峰が甘えてくるのは珍しい。そんな彼の行動が嬉しくて、幸せだった。

「私も、寂しかったですよ。紫峰さんも私も忙しくて、すれ違っている感じがした。こんな風に抱き合うのも久しぶりだったし。寝込みを襲われちゃったけど、よかった」

美佳が素直な気持ちを言うと、紫峰が首に顔を埋めたまま微笑かに笑った。

「美佳がこんな薄着で寝てるから、我慢がきかなかった」

紫峰はそう言って顔を上げ、もう一度ゆっくりとキスをしてきた。蕩けるようなキスに溺れ、美佳は何も言えない。

美佳は確かに寝る時、いつも薄着だ。布団の感触が好きだから、身につけるものは最小限にとどめて布団に包まる。そうすると肌が直接布団に触れ、とても気持ちいい。紫峰は「また薄着をして」

いつも呆れているけれど、どうしてもやめられないのだ。

紫峰の「我慢がきかなかった」という言葉が嬉しくて、顔が熱くなる。愛されているという実感が込み上げる。こんな平凡な自分を、これほどまでに愛されヒロインにしてくれるのは、世界中探しても紫峰だけに違いない。

繰り返されるキスが気持ちよくて、次第に思考能力を奪われていく。深いキスに応じていると、美佳の身体は少しずつまた熱くなっていく。

「……もう一度していいわけ？」

唇を離れた合間に、紫峰が堪らない様子で言った。

すでに紫峰の下半身は、美佳の腹部を押し上げている。美佳は紫峰自身に、スウェットの上から触れた。すると紫峰が美佳の手を自分のスウェットの中へ導き、直に触れさせる。紫峰の大きな手が、そのまま美佳の手を上下に動かす。美佳はされるがままに、しばらくそれを繰り返した。

「さっきみたいに、ゆっくりされるのは苦しい。そうじゃないなら……」

「君の声が、聞きたかった。君の耐えるようなあの声が、すごく好きだ」

美佳は急に恥ずかしくなり、紫峰の胸に額を寄せ、赤くなった自分の顔が見えないようにした。そんな風に言われると何も言えない。

黙り込む美佳の胸に、紫峰が触れてきた。そのまま手が下において美佳の足を開かせる。紫峰が自分のモノから美佳の手を離して、シーツの上に縫いとめた。

反応した紫峰のモノは、抵抗なくスルリと美佳の中に入った。思わず声が漏れる。

すると紫峰が美佳の頬を大きな手で包み、優しくキスした。それから美佳の足の間に手を這わせ、隙間に触れる。紫峰が指で触れると美佳のそこは濡れた音を立てた。恥ずかしくなって、思わず顔をそらす。

「じゃ？」

「……っ、そうじゃなくて……またゆっくりするの？ 紫峰さんがイッてくれないと、私、ずっと……っ！ っあー！」

「よすぎて苦しい」と続けたかったのに言葉にならない。紫峰は美佳の中にすべてを入れきり、一度身体を揺らしてから、美佳の髪を優しく撫でた。

「早く、つてこと？ それは無理」

紫峰がにこりと微笑む。その顔は、美佳の目にはどうしようもなく色っぽく映った。

「ベッドの上でくらい、君を思うままにさせて」

「何、それ……っ」

紫峰は意味深な言葉を呟き、また緩やかな動きを繰り返した。

何かを耐えるような紫峰の顔を見上げながら、美佳はとても苦しい時間を過ごす。しつかりとしなやかな筋肉のついた紫峰の身体が上下するたびに、声が漏れる。

身体が激しく脈打って、美佳に快感を知らしめる。

どうして紫峰は、自分をこんなに愛してくれるのか。

「君が好きだから」と言って微笑んでくれるのか。

仕事中はあんなにクールだった紫峰が、今は美佳の上でこんなに乱れている。

その事実がたまらなく愛しくて、恥ずかしくて、でも心地いい――

4

紫峰に激しく抱かれた日も、仕事だった。

出版社で戸田と打ち合わせ中だというのに、ボーツとしてしまっていたようだ。

「美佳、疲れてんの？」

美佳は慌てて笑みを浮かべ、その場を取り繕う。

「大丈夫です」

今日は久しぶりに茶道の師匠のところへ寄って帰ろうと思い、着物を着ている。帯の締め付けが、少しきつい。

「そう、じゃあ、話を戻すけど、今回のドラマの件で、原作の小説も増刷をかけることになったから。そこで相談なんだけど、サイン会を開かせてくれないか。今回はうちの会社にとってビッグプ

ロジエクトなんだ」

美佳はこれまで、人前に出てサインを書くなんて気が引けて、サイン会の申し出を断り続けている。

戸田は黙り続ける美佳に焦れて、ふたたび口を開いた。

「ぜひ協力してくれると嬉しい。君の小説は、多くの女性から共感を得ていて、新作が待ち望まれているんだ。それに、今書いているコラムも評価が高く、エッセイスト賞にノミネートされている。君は今をときめく人気作家だ。もっと自覚してくれると嬉しいと、常々思っている……」

「そう言っただけで嬉しければ、家庭を第一に考えたいので……」

「それは旦那のため？ SPなんて、不規則な仕事で大変そうだな」

「違いますよ。自分のため。私は、あの人が仕事から帰って来るのを家で待っていたいんです」

「そんな風に着物を着てか？」

戸田はあきれるように笑った。それを見て、美佳は首を横に振って苦笑した。

「いつも着てるわけじゃないですよ。今日はちょっと寄るところがあるから。紫峰さんは、着物姿が好きだとは言ってくれるけど、いつも着ていたらクリーニングも大変です」

今着ている青い着物は取材旅行で購入したもので、特に気に入っている。

着物姿の自分を見る、紫峰の目を思い出す。本当はずっと着ていたいが、やはり洋服の方が動きやすい。

「旦那の名前変わってるよな。どういう字を書くんだ？」

「紫の峰です。私も変わってるな、って思いました。お父様の実家が、お寺なんですって。お父様の名前もお兄さんの名前もそんな感じなんです」

戸田は「ふーん」と言って、手でもてあそんでいたボールペンをテーブルに置く。

「サイン会の件、くれぐれも頼む。君はもう少し積極的になるべきだ」

美佳は俯いて、ため息をつく。

「気負うことないよ。サインだって、凝ったものである必要はない」

美佳は笑みを浮かべた。自分に自信はないけれど、結婚して少し痩せたし、以前よりは見られるようになってはいるはず。

「わかりました。サイン会の件、引き受けます」

美佳が言うと、戸田は「やった」と言って笑顔になる。

「ドラマ放送はまだ少し先だし、その告知が出てからサイン会をしたいと思っている。日程はまた連絡する」

美佳は頷きながら戸田の話を聞いた。

いまいちピンと来なかったけれど、戸田は信頼できる仕事相手だ。だから美佳は執筆以外の部分については、彼の言うことに従おうと思っている。こういう販促活動について深く考えるのは苦手だ。

* * *

美佳が打ち合わせを終えて出版社を出たのは、夕方近くになってからだった。

小さく嘆息して、眠いな、と思う。昨夜眠ったのは二時か三時。でも、紫峰に朝ご飯を食べてもらいたくて数時間後には起きた。

今日、昼から出勤した紫峰は、明日の朝まで勤務の予定だ。だから今日は早めに寝れるし、夕飯も簡単なもので済ませよう。

「紫峰さん、今頃どこで仕事してるんだろう？ ……それにしても、サイン会かあ」

呟いてみると、さらに気が重くなった。そうは言っても、約束してしまったのだから果たすだけだ。美佳は気持ちを切り替えようと思い、歩き出す。

足取りは、決して軽いとは言えない。美佳の身体に広がる疲労感は、昨晚紫峰から与えられたものだ。身体は少し辛いけれど、それも心地よく感じた。